

子どもたちのための学校

東京都立大学名誉教授 上野 淳

目 次

1. 学校建築の来し方・行く末
2. イギリスの学校改革と小学校建築
3. アメリカの学校改革と小学校建築
4. 日本の学校改革と小学校建築
5. 住居としての学校
6. 中学校建築
7. 地域社会と学校

本稿は、株式会社日本総合研究所が上野淳氏をお招きし、2022年11月9日に開催した勉強会の内容を掲載したものである。上野氏の許可を得て編集し、すべての文責は株式会社日本総合研究所にある。

1. 学校建築の来し方・行く末

今日は、「子どもたちのための学校」というテーマでお話をさせていただきますが、その前に、学校建築の来し方、行く末を少しだけ話させていただきます。

まず、日本の学校建築の源流というか、起源というか、どうして今の形ができ上がってきたかということです。これは、松本にある開智学校です（図表1）。明治9年に建ちました。日本に学制が発布されたのは明治5年。この開智学校は、その後しばらく経ってから建設されたのですけれども、学制が発布されてわずか5年後に日本の小学校の数は2万5,000校、今の数に匹敵するような数になったと言われています。

その当時、この開智学校も含めて地域の学校は、地域の人たちの寄附とか浄財で建てられました。文字通り、学校というのは地域のものだったと言えると思います。ただし、この学校、疑洋風ルネサンス様式といいまして、非常に丹念にデザインされているのですけれども、建築的な今日の技術に照らすと、例えば方位を無視しているとか、天井が低いとか、通風のことで、換気のことを全然考えてないとか、窓が小さくて、照明は暗いなど、かなり課題があったということになります。

それで、しばらくしてから、当時の文部省がこういう事態を打開しようとして、学校建築の原型としてモデルプランを発表しました。「学校建築図説明及び設計大要」というプランです（図表2）。教室が真っすぐ並んでいて、片側廊下で、通風や採光がちゃんと考えられている。つまり、約100年以上前に日本の学校建築の定型ができ上がったと言えると思います。

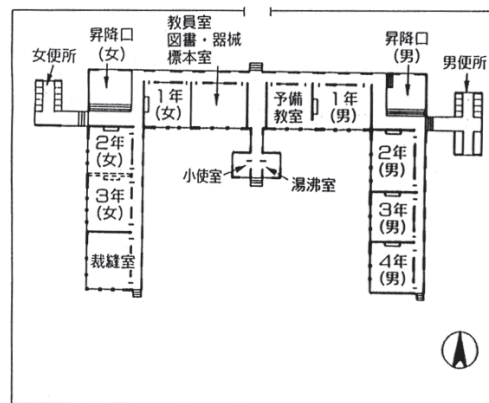
これが教室の定型です（図表3）。間口5間、奥行き4間、 $4 \times 5 = 20$ 坪。1坪、3.3平米ですから、66平米のなかに、当時は80人がクラス定員として勉強していました。

（図表1）開智学校（松本市）



（資料）執筆者撮影

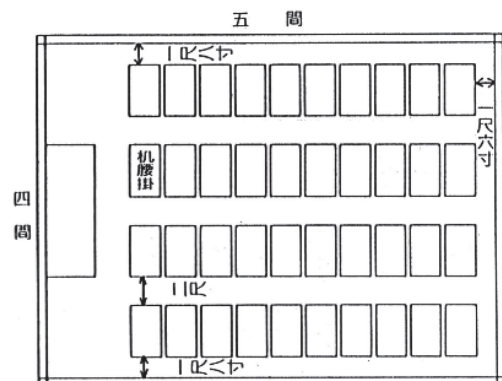
（図表2）明治時代の学校建築モデルプラン



『学校建築図説明及び設計大要』仮想設計：1895年（明治28年）

（資料）上野淳 [1999].『未来の学校建築』岩波書店

（図表3）学級教室のモデルプラン（明治時代）



平面図
4間×5間の教室平面：明治中期 2人掛の机（3尺6寸×1尺2寸）を20坪の広さの中に80名収容すべくレイアウトした当時の標準図。その後の教室の原型となった。

（資料）上野淳 [1999].『未来の学校建築』岩波書店

これは、現在、遺構として残っている府中尋常高等小学校、昭和に建った学校です（図表4）。これも明治以来の学校建築の定型を引き継いでいるわけですね。大きな窓をとるというのは、自然採光で何とか教室に光環境を確保しようとするというようなことだったと思います。

しばらくしてから、大正期になって、関東大震災の後ですけれども、学校がやっとRC造になりました。これがその当時の番町小学校のプランですけれども、教室がきちんと並んでいて、片廊下で端部に特別教室があるRC造校舎となって引き継がれたわけです（図表5）。

（図表4）府中尋常高等小学校の遺構：その教室内部



（資料）執筆者撮影

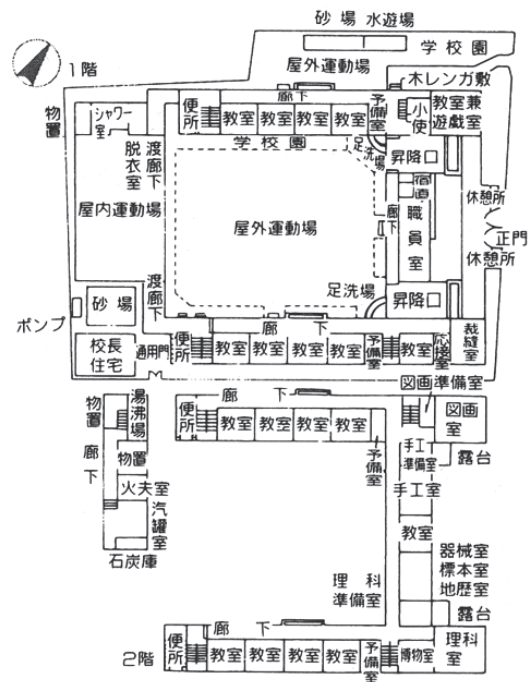
これが今日の学校の大体の教室プランで、8 m × 8 m = 64平米（図表6）。今日のクラス定員は40人です。言いたいことは、100年以上、文部省による学校建築の定型が発表されてから、日本の学校建築の基本的なストラクチャーというのはあまり変わってこなかったということです。

校舎の典型的な姿は、真っすぐ校舎がある。で、南側に大きなグラウンドがある。真っすぐな廊下、そして、同じような教室が並ぶ。学校の先生方は、こういう校舎がお好きなのですね。真っすぐな廊下、死角がない。いつでも子どもを監視できる、そういう定型になるわけです。

2. イギリスの学校改革と小学校建築

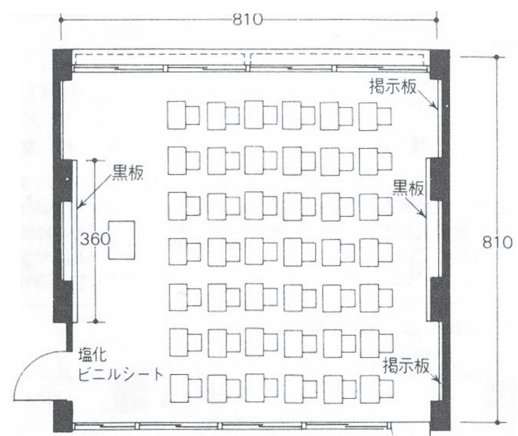
次に、20世紀後半になって学校建築の改革がどんなふうに進んできたかということを見ていきたいと思います。

（図表5）大正期のRC造校舎



（資料）上野淳ほか [1995]. 『S.D.S. シリーズ2 / 学校』 新日本法規出版

（図表6）現在の一般的な普通教室の平面



（資料）上野淳 [2008]. 『学校建築ルネサンス』 鹿島出版会

まず、イギリスです。ロンドンにあるEveline Lowe Primary Schoolという、我々にとっては古典的な学校です。テムズ川の東側にある低所得者の方々が割と多い地域の学校ですが、これが当時のイギリス文部省のモデルスクールです。

これが学校の玄関で（図表7）、そこの奥をちょっと曲がると、こんなスペースになっているわけです（図表8）。これがこの学校のプランですが、この学校には閉じた教室がないんです（図表9）。空間にス

（図表7）Eveline Lowe Primary School の玄関
（1965 英）



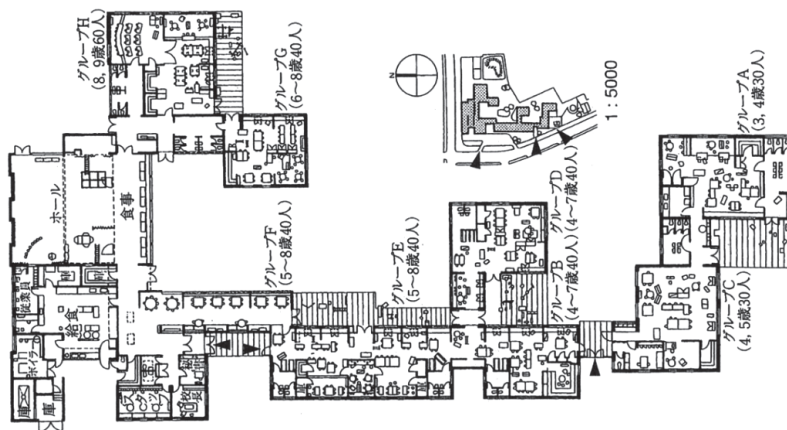
（資料）執筆者撮影

（図表8）小スペースが連続する校舎内部
（Eveline Lowe）



（資料）執筆者撮影

（図表9）Eveline Lowe School の校舎平面図



（資料）上野淳ほか [1995]. 『S.D.S. シリーズ2／学校』 新日本法規出版

ペースがずうっと連続していて、様々なところに特定の学習目的を持ったコーナーがあります。

その当時、1963年だったか、イギリスの文部省の教育審議会のようなところが、これからの学校建築の指針を出そうということでレポートを出しました。プラウデンレポートというのですが、そのタイトルが‘Children and Primary’、つまり‘子どもたちのための学校’、そういうテーマですね。

要するに、閉じた教室を廊下で真っすぐつないでいくという、そういうことではなくて、様々な学ぶ場所を、空間的に連続的につないでいこう。で、子どもたちは先生との相談において、きょう、私はこ

ういうことを学びたい、この時間はこういう学習活動をするということで、様々なコーナーに子どもたちが散って行って学習する。こういう学校というのは、一斉のクラス単位の授業が少なく、私としては、初めて訪れた時大変な衝撃を受けました。

これが日本でいうと、いわゆるクラスルームみたいな場所です（図表10）。クラスのメンバーが先生と一緒に集まって、さあ、これからの2時間、君はどんな勉強をする？私はこんなことをしたい、あなたはこういうことをするべきですよ、というような相談をして、それで学校のなかに散って行って、またこのベースに戻ってくるという、そういう学習活動をしています。

当時の私は、この学校に一生懸命通って、どんなスペースにどんな家具が置いてあって、どんな意味が込められているかということスケッチしたものです。例えばここは生き物を飼ってあって、低学年のスペースですけども、生き物を観察したり育てたりしながら、それをいろんなふうで学んで、レポートを書いて、それでいろんな研究をするというか、そういうコーナーが設定されているわけですね（図表11）。算数を勉強する人が集まってくる場所とか、工作を勉強する人が集まってくる場所とか、そんな意味が込められているということになります。

繰り返しますけれども、プラウデンレポートに沿って、これはその当時のイギリスの文部省のモデル校だったのですが、要するに、一斉に子どもたちに何かをティーチするというのではなくて、子どもたちの自主的な課題探求的な学びを中心にしたら学校はどうなっていくだろうか、ということを経験家と教育学者が相談して造った学校ということが言えます。

いろんなところに図書コーナー、学びのコーナーが散りばめられているわけです。それで、この学校に何日も通っていて、おかしいな、高学年はどこにいるのだろうかということに3日目ぐらいに気が付きました、「そうなんだよ、上野さん。この学校は地域からすごく人気があって、みんながこの学校に在籍してくれるようになったから、学校が手狭になってしまったので、50mぐらい行った場所の古い住宅を学校で買って、このなかを学校にしました」ということでした。

これがその学校のなかの様子ですが、一人ひとりの学びのアクティビティを受け止めるのが学校だということであれば、何も同じ大きさの教室が並んでいるようなところではなくて、極端な言い方をすると、

（図表10）学校のなかに設定される学習コーナー
(Eveline Lowe)



（資料）執筆者撮影

（図表11）観察・展示コーナー (Eveline Lowe)



（資料）執筆者撮影

住宅でも学校になり得るといふ、そういうことです（図表12）。昔の大邸宅を、いろんな場所にいろんな学習のコーナーを設定して、学校にしつらえる。例えばここにはフランスの地理や歴史を学ぶコーナーがあるとか、台所は水やガスが使えるので、理科の実験スペースになるとか、コンピュータを置いておけば、それがコンピュータ教室になるとか、大きい部屋は、クラフト、アートの部屋になるとか、もっと大きい部屋は、例えば演劇の勉強をみんなでする場所だというふうな、そういうしつらえになっているわけです。

イギリスの学校の話をする、その後の1970年代、80年代、90年代とすごく長くなりますが、とにかく1960年代頃からイギリスにはこういう学校改革が起こったということを知っていただければと思います。

3. アメリカの学校改革と小学校建築

次はアメリカです。1970年代から80年代にかけては、実は、こういう学校がアメリカでは一世を風靡しました（図表13）。外観は工場かデパートか、そんなように見えますが、実は、これは学校なんです。

学校の真ん中にこういう大きいラーニングセンターがあります（図表14）。ラーニングセンターというのは、日本でいうと図書室と視聴覚教室とコンピュータ教室が集まって、真ん中にオープンなセンターとして構築されているという姿です。これが学校のプランなのですけれども（図表15）、体育館と同じようなスケールの空間が幅30m、長さ90mにわたって、さえぎる壁がなくずっと連続的に続いていくという学校です。巨大なオープンスペースをその時々の教育のニーズに対応して空間を仕切って、クラススペースやコンピュータスペースや実験スペースやミーティングスペースに造り替えていく、そういうことであります。

（図表13） Fodrea Community School 校舎全景
（1973 米）



（資料） 執筆者撮影

（図表12） 住宅を改造した学校の内部（Eveline Lowe）



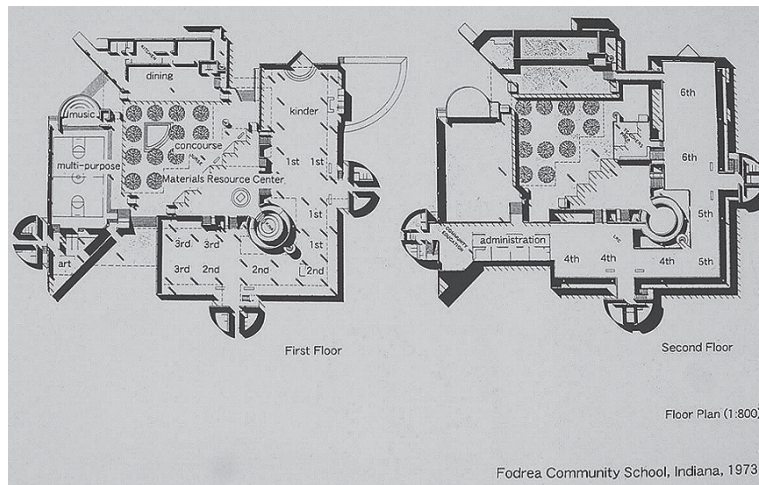
（資料） 執筆者撮影

（図表14） 校舎内部のラーニングセンター（Fodrea）



（資料） 執筆者撮影

(図表15) Fodrea Community School 校舎平面 (1973 米)



(資料) 上野淳ほか [2004]. 『アメリカの学校建築』ポイックス社

この背景には、学校というのは30年、40年、50年、ずっと使うのだけれども、そのときそのときによってクラス数や児童数も変わるだろうし、教育の内容も教育のフィロソフィだって変わるから、基本的な大きい空間をつくっておいて、そこをフレキシブルな環境にしておいて、その都度教育の状況に応じてスペースを組み替えて使う、それが学校の姿ではないかという、そういう思想です。こういう学校はカリフォルニアにも、ニューヨークにも、いろんなところにあります。初めてこういう学校へ行くと、“なんだ、これは一体”という、そういう感じがします。

ただ、こういう学校は、1990年代になると急速に影を潜めました。やっぱり集中力とか、音の問題、こんな巨大なスペースは本当に子どものための空間なのかという基本的な疑問があって、急速に減っていきました。ただ、当時、私どもが学校建築の勉強を始めたときに思ったのは、これが学校建築の姿の理想というふうに言うつもりは全くありませんけれども、さっきのイブリン・ロウを見ていただいても、この学校を見ていただいても、学校というのはいろんな考え方があるのだ。それがあっていいのだ。それから、時代や、とくに国の思想によっていろんな在り方があるのだな、ということは学んだところです。

4. 日本の学校改革と小学校建築

日本でも1970年代から80年代にかけて定型的な教室が真つすぐ廊下に沿って並んでいるという学校の姿を見直そうという機運が起きました。これは、裏返すと、クラスのなかで40人が一条乱れず、一斉に同じことを学ぶ。先生の指導の下に学ぶというか、教えてもらうというか、全員が一斉に画一的な進捗で勉強していく、ということが前提だというのが学校だったわけですが、70年代から80年代にかけて、本当に日本の学校はこれでいいの？という、かなり深刻な疑問が発せられるようになりました。

その嚆矢となったのが、愛知県の東浦にある公立の緒川小学校です。今見ていただいているこの写真は、別に休み時間の写真ではなくて、学習時間です (図表16)。

これは4年生のスペースなのですけれども (図表17)、この時間は週に1回だけ、2時間続きで、一人ひとりがどの教科のどの部分を学びたいかということが先生との相談で許される時間です。皆さんの子

どもの頃を思い出していただくと、俺はもう今習っていることは大体塾で習っちゃっているとか、あるいは、今、先生がやっている、みんなと一緒にやっている授業は、私はついていけないとか、あるいはずっと社会を勉強してきたけれども、この4日間ぐらい、ちゃんとそのことを自分でノートにまとめている自信がないとか、子どもというのは心のなかにいろんな意味での学習に対するこだわりがあるのですね。

(図表16) 緒川小学校の学習風景



(資料) 執筆者撮影

(図表17) 緒川小学校4年生の学習スペース



(資料) 執筆者撮影

だから、この緒川小学校では、週に1回、2時間だけ、どの教科をどの場所で誰とどういうメディアで勉強してもいいのです。これを週間プログラム学習というのです。この当時の緒川小学校の在り方は全国から非常に注目を浴びまして、オープンスクールの幕開けというふうに言われました。

これがこの学校の平面図です(図表18)。とくに変わった学校ではないのですが、学年ごとに2教室分ぐらいのラーニングセンターという大きなスペースがつくられたのです。この部分、4年から5年たったらどうなったかという、壁があって、廊下との間にも壁があるというのを、学校の先生方が夏休みに徐々に取り除いていったのです。なぜかという、閉じた教室で一人対40人で教えるというアクティビティから、もう少し隣のクラスと、習熟度別編成というのですけれども、学習集団を組み替えたり、あるいはさっきの週間プログラム学習のように、この時間は私はどこでどういう勉強をしたいかということ子どもに委ねる環境だと、教室が閉じていて、それで廊下とつながっているという閉鎖的な空間だと、全体に子どもたちに対する触発力というような空間の力がないということで、先生方が自ら徐々に教室と廊下との間の壁、場合によっては、教室と教室の間の壁を取って、開いた環境をつくって

(図表18) 緒川小学校：校舎平面図



(資料) 上野淳ほか [1995]. 『S.D.S. シリーズ2 / 学校』 新日本法規出版

いかれたという、極めて稀有なケースです。

これは（図表19）、個別の学びの時間帯に、先生に、私、今、ここまでできたのですけれども、どうでしょうか、というチェックを受けているところです。小さな部屋に、先生が単元のビデオを作って、ビデオ教材で反復勉強ができる場所とか、あるいは国語の専門の先生にいろんなことを相談する場所だとか、それから、例えばカマキリにはまっていて、自主研究でカマキリがどういうふう呼吸して、何を食べて、どんなふうにいるのだからかということのレポートを書きたい。2時間そういうことに集中するわけですね。

これは1980年代の半ばぐらいの写真で（図表20）、コンピュータはまだ古いですが、その当時からコンピュータはなるべく子どもに触れさせて使わせていけば、子どもたちはすぐに使えるようになるという、この学校の先生方はそういう確信を持っておられて、コンピュータは常にオープンに設置されていました。そうすると、子どもたちは興味を持つ。全員がではありませんけれども、そういうことに長けた子どもというのはいますよね。どんどん自分で勉強して、簡単なプログラムを書くようになる。

この学校では「数のほげみ」「漢字のほげみ」という、そういうステップ教材が用意されていて、小学校の1年から6年までに学ぶべき算数の課題が90ステップにプリントに分けられています。で、子どもたちはこの時間になると、私は今日「数のほげみ」を進めたいと一生懸命勉強したり、そういう自由が委ねられているということになっています。

1クラス40人、みんな同じ進度でずっと並んでいくというふうに思われてはいますが、実は、ずっと先に行っちゃっている子と、今、みんなと一緒にやっていることをまだよく分かってないとか、個別な状況があるはずなのです。こういうことをこの学校は素直に認めて、それを一人ひとりの子どもについて、今、この子どもはどのような状況にいるのか、どこのステップにいるのか、ということちゃんと把握することを個別化というふうに呼んでいるわけです。

それで、この学校では、さっきの週間プログラムの時間に、例えば先生と相談して、先週やった理科の実験をもう一度やってみたいということが許されます。経験がありませんか。小学校の理科の実験というのは四人か六人でやっているでしょう。そうすると、活発な子がどんどんやって、あと一人や二人の子は見ていだけで、実は、自分でやりたかったみたいなの、そういうこともここでは許されるわけです。

この学校が開校したのは1979年ですが、非常に前向きな先生たちが大学の研究者と一緒になっ

（図表19）個別学びの時間帯（緒川小学校）



（資料）執筆者撮影

（図表20）オープンなコンピュータ学習コーナー（緒川小学校）



（資料）執筆者撮影

ていろんなプログラムを開発して、いろんな学習のモデルを発信するようになりました。1980年代の後半ぐらいになると、クラス一斉に一緒に時間で同じ場所で御飯を食べるというのをやめてしまいました。なぜかという、さっきのような学習の場面では、こういうことがありますよね。今日、私はすごく頑張ったから、もうこれでいいや。給食の時間になったけれども、今、ちょうどのってきて、あと、もう10分、15分やればすごくいいところまでいくので、もう少し勉強したいとかという、そういう個別な状況があるわけですね。

こういう学習モデルが定着してくると、では、ある時刻からある時刻までは給食の時間にするけれども、どこでいつ誰と御飯を食べるかを自由にしましょう。そうでないと、こういう弾力的な学習モデルをつくっているのに、給食の時間だけ、全員一斉にクラス単位で一緒に食べるというのはおかしいじゃないか。したがって、どこでいつ誰と食べてもいいようにしましょうと。

言ってみれば、さっきのイブリン・ロウのときもちょっと申し上げましたけれども、一人ひとりのための学校。学習とか生活が一人ひとり、個別的で個性的であるべきだ。ある課題に対してアプローチする方法も、人によっては非常に手っとり早く進む子と、いろんなこと、周辺のことを調べながらだんだん核心に迫っていくという、そういうアプローチをする子どもがいてもいい。そういうことを学習の個性化と呼んで、弾力的な学校にしていこうというのがこのフェーズだったわけですね。1980年代から90年代にかけては、こういう学習の個別化、個性化ということがかなり全国の学校にも認識されるようになりました。

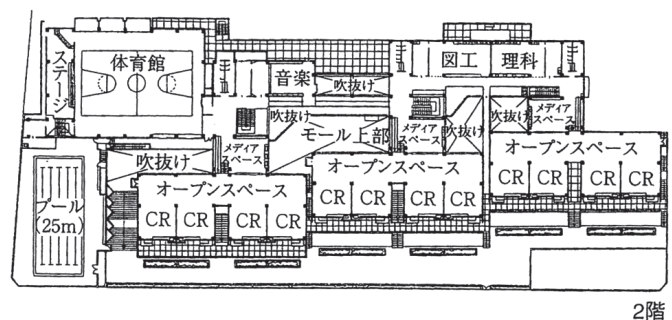
それからしばらく経って、私の大学の師匠は学校建築の大家だったのですが、その師匠と一緒に、目黒の宮前小学校という公立の小学校がちょうど建て替えだったので、基本設計を研究室でやることになりました。師匠について一緒に勉強して、この学校の設計をしたのですが、この学校には昇降口をちょっと入った右側にオープンな図書室があります、閉じてない図書室。学校へ来て教室へ行くこの廊下の傍にいつもオープンな図書室があって、このスペースが子どもたちに対して、「こんな本があるから読んでみない?」とか、「先週、こんな新しい本が来たよ。どう、ちょっと図書室に寄ってみない?」という風呼びかける、環境が読書を誘うような、そういう環境を構築しようと思ったわけです。

これに対して、例えば、誰かが勝手に本を持っていっちゃうのではないかとか、なくなっちゃうんじゃないかとか、あるいは静かであるべき図書室がこんなオープンでいいのか、などの疑義が出されました。いや、でも、子どもたちは大変この空間を気に入ってくれています。

これがプランです(図表21)。全部で12クラスの学校なのですが、教室に同じくらいの奥行きオープンスペースがくっついている。それで、2学年ずつのクラスターにして学校を構築していくという学校です。

ここも同じように、1週間に1回だけ、2時間続きで「川と人間のくらし」とい

(図表21) 宮前小学校：校舎平面図



(資料) 上野淳 [2008]. 『学校建築ルネサンス』 鹿島出版会

うテーマで、探求的な学習をやっておられました。川の上流と中流と下流では、地形も違いますし、川の勢いも違いますし、幅も違いますし、そこで立脚している産業も違いますし、人々の暮らしも違うわけですね。そういういろんなテーマが成り立ち得るので、この「川と人間の暮らし」をテーマに、ここにはこんな学習の素材があるよというヒントが述べられていて、子どもたちは自分はこのことを勉強してみたいということで課題を選んで、それで、いろんな場所で思い思いにこの2時間は勉強できるということになります。

こういう姿を見ると、なんてだらしない、お行儀が悪い、というふうにおっしゃる方もいらっしゃいますが、子どもたちは夢中になるといろんな場所でいろんなふうな姿勢でいろんなふう打ち込むという姿になります(図表22)。

それで、この2時間続きが終わりに近づきますと、3年と4年が全員集まって、リーダーの先生の下で、15分間、振り返りのミーティングをやる。そうすると、3年と4年のスペースが連続した2学年の共同の学習ですので、例えば3年生の子が思いがけず、すごくいいテーマで、深い学びの学習をして、すごく素敵な発表をしたりすることがあるんですね。そういうことがみんなの刺激になる。普通は1クラスの40人の集団のなかに閉じ込められていたわけですが、そういうことがいろんな意味で大きく発信していくという、そういう効果があるというのも、私はこの学習を見ていて実感しました。

この学校は普通の学校と違って、教室の前が、小さな庭になっています(図表23)。日本の学校というのは、校舎を真っすぐ建てて、その手前南側が大きなグラウンドで、何か子どものスケールを無視しているというか。だから、師匠が、「この学校はどうしても平屋建てでやってみたい。子どもたちの環境というのは、上野君、絶対平屋建てだよ」とおっしゃって。で、教室の前にはちょっとしたテラスがあって、その奥に庭があってという、そういう子どものスケールを大事に設計してみたいということで、こういう学校を造りました。

5. 住居としての学校

さて、こういう学校を造ってきてはみたのですが、何かちょっと割り切れないなということがあって、ちょうど世紀末から今世紀にかけて、やっぱり何といても子どもたちの学校、そして住居としての学

(図表22) 個別学びの学習風景 (宮前小学校)



(資料) 執筆者撮影

(図表23) 平屋建ての校舎の教室テラス (宮前小学校)



(資料) 執筆者撮影

校ということをテーマにしてみたいと思うようになりました。

この学校は、千葉県の幕張という新都市にある打瀬小学校です(図表24)。若い建築家の人たちが、「学校の設計の経験がないけどぜひこの仕事をコンペで勝ち取りたい、上野先生、一緒にやってくれませんか」ということで、若い建築家と共同して造りました。

これは、門と塀がない学校なのです。なぜかという、私は学校は街だと思ひ、街の要素を学校に取り入れるという、そういうことをコンセプトにして、この小学校をデザインしたらどうかというふうなことを思いました。ちょっと乱暴かもしれませんが、できるだけ地域の方々に気軽に学校のなかに入ってきていただきたい。子どもたちも、街という全体のなかで僕は過ごしているのだ、という意識を持たせたいというようなことを思いました。しかも、この幕張という街は非常に新しく、街のデザインそのものも斬新な街なので、そういう街のデザインのコンセプトに従った学校を造ろうということにしました。

どういう姿かという、これが学校の敷地で、こちらに小さな近隣公園があるのです(前掲図表24)。で、サッカーでボールを蹴ると、塀がありませんので、ボールがそっちへ出て行っちゃうのです。で、垣根を越えてボールを取りにいった戻っているという、そういう写真なのですけれども、できるだけ地域との近さを演出したいということで、こういう学校を造りました。

‘学校は街、街が学校’(図表25)というコンセプトです。で、向こうが地域の街区なのですが、その街区が真っすぐ学校のなかに入ってきて、右に曲がると1年生の玄関、左に曲がると3年生の玄関、階段を上がっていった小さな玄関を入ると4年生の玄関というふうに、街の街区に沿って入り口があって教室がある、そういうデザインにしてみたらどうかというふうに思いました。

それから、できるだけ外部空間を素敵に魅力的につくってあげる。よく教育委員会の人たちとか校長先生と学校の設計の話をする、なるべく教室は真っすぐ、グラウンドは広く、で、死角をなくしてくださいみたいな、そういう話になるのです。グラウンドがなるべく広くて、校舎が3階建て、4階建てでそそり立って真っすぐになっているというのが、ほんとに子どもたちにとっていいのだろうかというようなことはやっぱりあるわけですね。

(図表24) 門も塀もない打瀬小学校



(資料) 執筆者撮影

(図表25) 街のような学校！(打瀬小学校)



(資料) 執筆者撮影

だから、私はできるだけ外部空間を素敵につくって、教室と外部空間との連続性を大事にします。そうすると、例えばこれは中庭で、天気の良い日は、暖かいからテラスで給食を食べましょとか、そんなふうにして子どもたちは使ってくれるわけです(図表26)。

若い建築家たちには、「学校というと、教室が一つの形が決まると、1年生も5年生もみんな同じ。それは正当なことなの?」と問いかけました。1、2年生は、まだ身長が120cmとか小さいし、いろいろな意味で活動力もそんなに大きくはない。5年、6年という、もう私と同じくらいの身長になったり、非常にアクティブだったりするわけですね。そういう年齢の違いを無視して、一つの教室を、8m角の教室で、3mの天井高で決めると、それが全学年に同じように適用されるなんておかしくない?、ということで、ここは低学年、中学年、高学年で教室廻りのデザインを変えました。低学年のスペースは、オープンスペースの天井高が2.4mです。

この学校は、校舎が真っすぐ東西に延びていて、南側に教室が面しているという、そういうプランではなくて、校舎を南北軸に造って、教室、小さな庭、教室、小さな庭、というふうに、南北の軸に沿って造っているんです。したがって、教室は両面採光。南にも北にも窓があって、教室が均質的に明るくて、風が爽やかに吹き抜けていく、そういうデザインにしました。

それで、これは低学年の場所である小さな場所です(図表27)。これを我々はDEN(デン)と呼んでいるんですけれども、言ってみれば、先生は入れないけれども、子どもが入れるという小さな空間。「これは何のために造っているんですか」と教育委員から言われるのですけれども、説明できません。つまり、子どもたちの体をすっぽり包んであげるような、そういう気持ちの休まるような場所を要所々々につくって、ところどころに散りばめてあげる。子どもたちはこういう場所が実は好きです。

均質な空間、均質な教室が、均質な廊下でずうっと真っすぐ延びていって、端っこに特別教室があって、それがそっくり3階建て、4階建てで立ち上がっていくという、そういう風景は子どもの心理にすごく圧迫感を与えているのじゃないかというのが私の考えです。

先ほど、打瀬小学校の前にちょっとお話をした宮前小学校とか、あるいは緒川小学校とか、やっぱり

(図表26) 中庭も素敵につくる!(打瀬小学校)



(資料) 執筆者撮影

(図表27) 子どものための小さな空間(デン)(打瀬小学校)



(資料) 執筆者撮影

大きいオープンスペースと教室がスペースに対して開いているとか、そういうユニットを行儀よく並べていく。しかし、それは本当に子どもの心理に沿った空間になっているのかということをお前は当時、かなり憂慮するようになりまして、それで、均質的に空間がずうっと、教室とオープンスペースが学年ユニットで行儀よく並んでいくというよりも、もう少し子どもたちの体の寸法だとか、心理だとか、空間に対するイメージみたいなことに寄り添うような学校を造れないかということで、こういう学校を若い建築家の人と一緒に造ってきました。

この学校は、昇降口が学年ごとにあります（図表28）。1年生の玄関、2年生の玄関、3年生の玄関。日本の学校というのは、小学校、中学校も履き替えますよね。下駄箱が、例えば24クラスの学校はずらーっと24個並んでいますよね。何か物すごく大きい空間で、子どもの心理とか空間スケールとかそういうことに本当に合っているのだろうか。だから、この学校はわざわざ昇降口を学年ごとにとりました。

階段もなるべく素敵につくる（図表29）。こういう学校では、少人数の集団をつくって、クラス集団の三十何人を六人ずつの集団に分けているんことをするというのも起こるわけなので、ゼミ教室を造りました。習熟度別編成といいまして、一般的な普通の一斉の授業に対応できる子、少し学習に遅れがあって、少人数で丁寧にもう一回初めから教えなければいけない子などというふうには、同じ学年の3クラスを習熟度別に編成し直す学習をこの学校はかなり採り入れてくださいました。

これは高学年で（図表30）、小さなゼミ教室みたいなものを造っておいたら、学校の先生方が工夫して、保健室や図書室などからいろんな標本を持ってきて、人体の博物館みたいにしてくださいました。それから、この学校もあるときから、学年ごとですけれども、どこで給食を食べてもいいようにしましょう、というようなことをしてくれました。

（図表28）学年別の玄関（打瀬小学校）



（資料）執筆者撮影

（図表29）階段も素敵につくる！（打瀬小学校）



（資料）執筆者撮影

（図表30）小さな博物館（打瀬小学校）



（資料）執筆者撮影

これは、実は特別教室なのですけれども（図表31）、図工教室、すごく素敵な場所で、左側に街区が見える。右側は中庭なので、すごく見晴らしがいい。そうすると、「きょうはここで給食にしたら？」みたいなことを子どもたちで言い始めて、このクラスはここできょう給食を食べているとか、そういうことです。だから、特別教室もできるだけ丁寧にデザインして、うまく造ってあげるというのが一番大事だと思います。

もう一つ学校を見ていただきます。多摩ニュータウン。私、実は、この学校のすぐ近くに住んでいるんです。若葉台という地域、東京の稲城市にある学校です。

市長さんと、その当時、この街を開発していた日本住宅公団、今はURというのですけれども、その二人が私の研究室にいらっしゃいまして、市長さんが、「先生、多摩ニュータウンでいっぱい学校を造ってきたけれども、みんな、コンクリートで真っすぐの学校。それが本当にいいかどうか、私は最近おかしと思う。だから、これは稲城市では多摩ニュータウンの最後の学校なので、子どもたちのために優しい木造の学校にしてくれないか。住宅公団が責任を持つので、上野先生、プロデュースしてください」と言われて、それで木造建築に堪能な建築家と一緒に仕事をしました。

レンガと木造の学校（図表32）。で、さすがに門と塀がないというのもここではやりにくいので、僕としては、塀はすごく低くして、なるべく地域の方々に親近感を感じていただけるようにした。学校に沿って駅に向かう道には塀がありません。この地域はもともと周囲が戸建て住宅地というコンセプトだったので、なるべく戸建て住宅地に対して優しい学校の景観をつくりたいなと思いました。

で、これも、南北に教室、庭、教室、庭というふうに、教室が両面採光で、いつも均質的な通風と光環境が楽しめる、そういう学校のコンセプトにしました。これが教室です（図表33）。ウッドデッキのテラスが全部についている。できるだけ傾斜屋根を

（図表31）特別教室も素敵につくる！（打瀬小学校）



（資料）執筆者撮影

（図表32）木造とレンガの学校：若葉台小学校



（資料）執筆者撮影

（図表33）教室の前のウッドデッキ・テラス
（若葉台小学校）



（資料）執筆者撮影

かけて、住宅のような概観にして、真っすぐそそり立った学校環境というのではなく、少しでも暖かい住宅のような雰囲気の学校というふうに子どもたちが感じてくれないか、ということテーマに学校を造りました。

ウッドデッキのテラス。木造の非常に柔らかいインテリア。で、ちょっと学年ごとに沈んだ場所があって、学年の図書コーナーがある。そして、こういう小さなDEN（デン）（図表34）。子どもの体を包むような環境。休み時間なんかには仲のいい子とここでひそひそいろんなこととお話しし合う。

この学校は、天井高を学年によって変えてあります。低学年は2.4m、中高学年は2.7m。実は、日本は建築基準法で、この当時までは教室の天井高は3mと決まっていた。基準法だから破るわけにいきません。したがって、本当の天井は上にあるのですけれども、格子天井で、下に30cm、40cm下げて、子どもたちの知覚としては低学年と高学年で子どもの寸法に合わせて学校の天井高が変えてある、そういうふうになりました。一緒に仕事をしている建築家からは、「先生、何でそんな面倒くさいことをするの?」と怒られましたけれども、「いや、これはぜひやってください」と。

この後、私、様々な啓蒙活動を試み、教室の天井高3mの基準法を撤廃しました。小学校の1年生も高校の2年生も、天井高3mと一律に決めていくこと自体がすごくおかしいじゃないか、そういうことを主張して、長い間運動してきて、論文をいっぱい書きました。そういうことが認められた。

で、真ん中にラーニングセンターがあります（図表35）。これは、さっきのアメリカの学校なんかで、必ず学校の中心にラーニングセンターがあるというのを実現してみたい。つまり、均質な空間がいつまでもつながっていくのではなくて、小さな場所もあるし、大きな場所もあるし、床の沈んだ場所もあるしというふうな、そういうことが学校にとっては大事ではないかというふうに思ったわけです。

地域社会に親しまれるというか、学校はニュータウンのなかで1番先にできる公共施設です。ですから、こういう素敵な学校を造っておいてあげると、ここに住んでみたいと思っただけ。事実、そういう方がたくさんここにいらっやいます。

（図表34）子どもの体を包む小さなコーナー（デン）
（若葉台小学校）



（資料）執筆者撮影

（図表35）学校の中心部のラーニングコーナー
（若葉台小学校）



（資料）執筆者撮影

6. 中学校建築

中学校の普通教室は何かというと、国語も、社会も、数学も、英語もやるし、ホームルームもやるし、御飯も食べる場所だし、道徳の授業もやるし、休息の場でもある。日本の中学校というのは、全部のことを一つの教室でやっているのです。この学校ではこれに対して、教科教室型の中学校、つまり、教科の部屋があって、子どものクラスの場所としてはホームベースという、勉強を教える場所ではないホームが別にある学校ならば、これが本当の中学校の姿だろうと思うということでやりました。もしも中学校の設計のプロデュースとして頼まれたら、私はこういう組立ての学校でないとプロデュースしませんと断っています。

下関、山口県の豊北町、そのときはまだ市ではなくて豊北町だったのですが、「四つの小規模な中学校がいずれも老朽化して行って、小規模になってしまったので、町として統合したいので、上野先生、指導してください」と町長さんから頼まれて、毎週のように通って、この学校を造りました。

四つが統合して一つの中学校を造るんだけど、この豊北町は将来、5年先に下関に統合される。だから、今のうちに豊北町としてのコアの姿をここに残しておきたいという町長さんの強い思い入れがあって、こういう学校を造りました。教科の教室ゾーンと、ラーニングセンターと、特別教室ゾーンと、そして子どもたちのホームルームの場所がある。ホームベースというんですが、こういうエレメントでこの学校は成り立っています。

学校の正門を入ると、大きい図書室があります(図表36)。これは、学校の図書室でもあるんですけども、地域の図書室です。四つの地域にそれぞれ小さな図書室があったんですけども、それが学校とともになくなるので、ここに町の図書室を集めて、学校の図書室と一体に造る、そういうコンセプトです。日中、市民がこういうふうにも本を借りに来られるんですね。それに、この場所は中学生の子どもたちも大好きな場所なので、日中、町の人々が普通に図書室を訪れる。で、何となく町の人たちも学校に親近感を持ってくださる。

これが真ん中のコミュニティテラスで、これはコミュニティの人たちが本を借りに来たときにちょっとくつろげるような場所をつくってあります(図表37)。それで、この奥に、パブとは言わないまでも、できればコーヒーショップみたいなものが開設でき

(図表36) 豊北中学校：学校の図書室は地域の図書館



(資料) 執筆者撮影

(図表37) コミュニティテラス (豊北中学校)



(資料) 執筆者撮影

るようにデザインしておきました。コミュニティラウンジです。

これは子どもたちのホームベースです（図表38）。ここでは教科の授業をしません。朝のホームルームや、お昼御飯や、帰りのホームルームをしたり、それから、授業に出かけて行って戻ってくるという、ほんとの子どもたちの生活の場所です。学校の真ん中にあります。ここにやってくる、次の教科の準備をして、出かけていくわけですね。このとき、かなり迷って、畳敷きの部屋にしちゃおうかなと思ったのですが、それはさすがに上履きなのでできないなというので、こういう姿にしました。これは昼御飯を食べているシーンです。つまり、ここは教科の場所ではなくて、生活の場所です。

これが教科ゾーンです。英語の場所（図表39）。教科の部屋があって、それで教科のメディアセンターがある。教科に関連する、いろんな教材が並べてある。そこへ行くと、どこの教科でどんなことを学ぶのか、ということ子どもたちが雰囲気を感じられる。そういう環境で、教科に対する生徒の興味を引きつけるという、そういうことを意図しています。

（図表38）生徒の生活スペース：ホームベース
（豊北中学校）



（資料）執筆者撮影

（図表39）教科ラーニングセンター（豊北中学校）



（資料）執筆者撮影

できるだけ教室は透明な環境にしようというふうに私は心がけています。一般の学校の教室というのは、なるべく中が見えないように、子どもたちが外に気が散らないようにしますが、私は違って、子どもたちがいろんな環境に対して学ぶモチベーションを触発されるようにするのが学校だと思っています。

7. 地域社会と学校

最後に、コミュニティスクールについてです。

これはイギリスのサットンセンターという、昔、私が勉強しに行った学校です。サットンという人口8万ぐらいの町の中心、ショッピングセンターの真向かいにこの学校があります。

入ると驚きます。スケートリンクがあって、ボーリング場があって、ボーリング場のなかを抜けていくとパブがあります（図表40）。ジムは、学校のジムですし、地域のジムになっています。学校の体育館は、地域の人たちだけの体育館です（図表41）。それから、身障者のためのデイケアセンター。ユースク

ラブ、カフェ、ディスコ、劇場、ナーサリー。ナーサリーはなぜかというところ、ここは生涯学習施設でもありますので、勉強に来た若いお母さんが子どもを預かってくれる場所がないと学習できないんですね。ボランティアの方がそういう子どもを預かるような場所。

(図表40) Sutton Community School :
学校のなかにPUBがある！



(資料) 執筆者撮影

(図表41) 学校の体育館は地域の体育館 (Sutton)



(資料) 執筆者撮影

この学校は、Sutton Center Community Comprehensive School。コンプリヘンシブスクールというのは、日本でいうと中学と高校のような義務教育の学校です。サットンの真ん中にあるコミュニティスクールだし、コンプリヘンシブスクール。つまり、生涯学習のスペースと、生涯体育の場所と、デイクラブと、ユースクラブと、普通の義務教育の学校が全く同じ建物のなかに一体的に設計されている。で、ここからがいわゆる学校の教科別スペースです(図表42)。

要するに、全く一体の建物のなかにコミュニティスクールも入っていますし、生涯スポーツも入っていますし、デイクラブもありますし、義務教育の学校もありますので、学校のなかの教室の移動のなかで、子どもたちはお年寄りとすれ違ったり、若いお母さんが勉強している姿とすれ違ったり、会釈を交わしたりして過ごすわけですね。学校の図書館が地域の図書館。そして、学校を出るとショッピングセンターがある。学校のなかにパブがあるのを見たとき、まだ30代の後半だったかな、いつか現役のときにパブのある学校を一回でも設計して終わりたいと思っていたのです。

私がプロデュースした昔の台東区上野小学校は、地域の温水プールが学校のなかにあります。だから、秋でも冬でも、一年を通じてプールの授業ができます。プールの授業は週に1回だけ、そのほかは全部、

(図表42) 生涯学習の活動 (Sutton)



(資料) 執筆者撮影

地域のスポーツセンターです。

できれば、パブとは言わないまでもコーヒーショップぐらいつくろうよ。地域の人たちが勉強に来たり、スポーツをしに来たり、料理を習いに来たときに、その後、ちょっとほっとしてコーヒーを飲んだりしたらいいじゃないかと。ですが、そこまでは実現しませんでした。そんな地域の活動が繰り広げられている建物のなかに子どもたちの場所があるという、そういうことです。

この学校の初代の校長先生は大変すばらしい先生でしたけれども、初めお会いしたときに、「こんなややこしい学校を造って、あんた、何考えているの?」と叱られました。学校の管理者の気持ちが分かっているのか。同じ建物のなかに地域のプールもあるし、地域のコミュニティ学習センターもある。

でも、この先生に3年在籍していただいて、最後、お別れのパーティーのときに、上野さんの言ったことがやっと分かった。この学校の子どもたちは、この学校ですべて生涯学ぶことができるということを何となく感じている。それはすごくいいことだと、最後は許してくださいましたね。

この学校は、こっちの道路から向こうの道路まで、日中はなかを抜けるような道造りであるのですね(図表43)。そうすると、お母さんが来て、うちの子、ちゃんとやっているかしらみたいな、こういうことを許しましょうよ、というのが私の手法です。

しばらくしたら、今世紀に入って、もうこういう学校が普通になりました。学校と地域教育施設と地域の図書館が一体になっています(図表44)。地域の子育ての支援プログラムもあって、若いお母さんと小さい子どもが学校に通ってきます。地域の図書館のほうが学校の小さな図書館よりも子どもたちにとってはとても魅力的なのです。いつも本が整えてあるし、とても新鮮な本があるし、子どもたちはこういう場所が大好きです。だから、中休みとかお昼休みに子どもたちが入ってきてても一向に差し支えありません。

コミュニティセンターも入っていますので、窓口とか事務所があります。で、この横に、喫茶おおぞら(図表45)。コミュニティの人たちがコーヒーショップを運営してくださっているのですね。やっぱり学校に来て勉強したりスポーツしたりして、では、来週の予定をどうしましょうかと、みんなで、三人ぐらいで、では、ここでちょっとコーヒー飲みながらミーティングしましょうねみたいな、そういうときに学校にこういうのがあってもいいのかと思うんですね。さすがにパブは実現しませんでしたけれど

(図表43) 上野小学校：学校は街！



(資料) 執筆者撮影

(図表44) 地域施設と複合化された小学校：志木小学校



(資料) 執筆者撮影

も、こういうことが徐々に受け入れられるようになっていきます。

コミュニティスペースでは、高齢のご婦人たちが大正琴の勉強をしている。その隣が学校の音楽室なのです。子どもたちが音楽室に行く間にこういうものを見て、すごい活気があるなみたいな、こういうところで地域と触れ合っているという姿があると思うんですね。

最後に、これは京都府宇治市の事例なのですが、普通の学校、あるときは学年5クラスぐらいだったのですが、どんどん子どもの数が減ってくる。一方、これは1980年ぐらいからの話なのですが、高齢者の数が増えてきて、全国にデイサービスを地域ごとに構築しなければならないという、そういう時期でした。

子どもの数は減って空き教室が増えてくる、そして高齢者のケアのニーズは高まってくるというので、1棟まるまる空けて、小学校の一つの棟をデイサービスセンターに改造していたのです。こういうふうに元の教室にデイサービスの場所が設定されている（図表46）。初めは、普通の小学校、子どもたちが行っている場所を、こんな障害がある、ケアが必要な高齢者の場所にして、何を考えているのだみたいな批判があったそうです。

（図表45）コミュニティセンターの喫茶コーナー
（志木小学校）



（資料）執筆者撮影

（図表46）学校の教室を改造した高齢者
デイサービスセンター



（資料）執筆者撮影

これはデイサービスの場所なのですが、この向こうには小学校の校舎がある。例えば音楽の授業の声とかが聞こえてくるわけです。そうすると、この人たちの孤立感がすごく和らぐと思うのです。ご存じのように、高齢者のデイサービスセンターとか特別養護老人ホームとかは、今や隔離社会ですから、誰も行かない。行ったこともないとか訪問する人も稀とかね。小学校も言ってみれば隔離社会といえれば隔離社会なのです。それをくっつけちゃった瞬間、こういうことが起こったのです。

子どもたちが中休みの時間に見に来て、おじいちゃんの話し相手になったりとか。学校の先生に行ってきたさいと言われているわけではないけれども、何だろうみたいな興味が湧いて、覗きにくる。そうすると、今まで閉鎖的な社会であったデイサービスと小学校がいきなり解け合うような、そういう雰囲気は私にここに感じました。

小学校の校舎というのは、均一であるだけに改造しやすいのです。午睡をとる場所だとか、お風呂

だとかの場所ですね。大体小学校は2時半か3時ぐらいに終わるのですね。で、デイサービスの利用者も大体3時ぐらいから帰るのです。そうすると、子どもたちが送りに来て、「おじいちゃん、今度、何曜日に来るんですか」と見送ってくれる。そのときに、私も何かちょっとぐっときましたね。子どもたちというのは本当に優しいのだなと。こうやって障害がありながらも一生懸命活力を取り戻そうとしている高齢者の姿を見てくれている。閉鎖社会の学校に地域社会のとても爽やかな風が吹いたような気がして、一瞬ぐっときました。こういうことがあり得るのじゃないかなと。学校にパブというのはちょっと行き過ぎの話ですけども、そういうことというのは、やっぱりこれからあっていいことではないかなというふうに思いました。

ただ、お役所の立場としては、なるべく両者がはっきり区切れている、つまり、子どもが勝手にそっちに行ったり、あるいは高齢者の方が迷って学校のなかに入らないように、できるだけ区分をはっきりするような設計にしましょうね、といった意識があるのですね。それは、お役所の建築担当としてはやっぱりやむを得ないかなと思うのですけれども、そういうことが両者の交流を阻んでいると思います。

ただ、理解がある校長先生がいらっしゃると、例えば七夕ですとかいろんな季節の行事に、七夕の笹を持って行って飾りましょとか、あるいはクリスマスのときに学校のオープンスペースにいろんな飾りつけをして、2時間ぐらい、お年寄りにデイサービスからこっちへ来ていただいて、みんなと一緒に過ごしましょとか、そういうことを一生懸命やったださる管理者、校長先生もいらっしゃいます。だから、今まで話しているいろんな学校でも、すごくいいときは、校長先生や教頭先生がすごく頑張っているのですよ。

こういう高齢者施設と小学校の連携も、一緒の敷地にはいるけれども、できるだけ分離しておこうというような役所のしがらみというか、やむを得ない体質と、しかし、せっかく一緒にいるから、だったら、お互いに交流し合いましょとか、お互いに知り合いましょとか、子どもたちにとっても、こういう高齢者の方々が障害を持ちながらも一生懸命生きておられるということは大事な姿なのだよ、ということを生きた教材として使おうと思ったださる管理者の方もいらっしゃるのです。この学校なんかはそうです。

だから、そういう学校側からの姿勢、高齢者施設からの姿勢というのがまちまちなので、正直言って、すべてがすごくうまくいっているというふうには思いませんけれども、やっぱりこういうふう共存していくことは非常に大事なことではないかと思うのです。こういうところの高齢者の方々は、隔離されているという隔絶感はすごく和らいでいると思うのです。それだけは確かですよ。

今、日本の一般的な学校は、全国的に児童・生徒数が減っていますので、教室が空き始めているのですね。だから、その開いている教室を一つ、廊下側の間仕切りを取って、その場所に絨毯を敷いて、いろんな個別の学びやグループの学習が展開できるような場所に家具を入れて設定することはかなりできるはずなのです。日本の多くの学校というのは、障害者にとっては非常に厳しい環境なのです。だから、インクルーシブな環境にしていくためにも既存のストックをバリアフリーにしたり、ユニバーサルデザインで、かつフレキシブルなスペースを、子どもの数が減ってきているということで、利用して、造り替えていく。そういうことが日本の将来にとっても非常に大きな課題になっているというふうに思っています。

○上野 淳（うえの じゅん）氏 ご経歴

1948年生まれ。1977年東京都立大学大学院博士課程修了、工学博士。建築計画学、環境行動研究。学校、病院、高齢者施設などの地域公共施設計画を幅広く手がける。主な著書に、『未来の学校建築』（単著、岩波書店）、『高齢社会に生きる』（単著、鹿島出版会）、『学校建築ルネサンス』（単著、鹿島出版会）など。2016～2021年度文部科学省「学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議」主査。